

からしだね

日々のみことばの黙想と、主日礼拝の準備に……(2026.3.2-3.8)

3.2
月曜日

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きるものとなった。」(創世記 2:7) ●人間は始めは単なる土であったと聖書は語ります。しかし、人間には神によって知性や意志が与えられました。神は人間をご自分のパートナーとしてこの世界を生きるようにされたとき、私たちの鼻から「息」を吹き入れられたました。ヘブル語の「息」(ルーアツハ)とは「霊」を表す言葉です。信仰者は皆、キリストによって遣わされる「聖霊」によって“生きる”ものとされます。単なる「土」でしかなかった私たちを陶器師として今の形に作り上げて下さった主に感謝したいと思います。

3.3
火曜日

「ただ、主に背いてはならない。あなたたちは、そこに住民を恐れてはならない。彼らはわれわれの餌食に過ぎない。彼らを守るものは離れ去り、主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない。」(民数記 14:9) ●ヨルダン川を渡り、約束の地カナン地方に入っていくことを躊躇する民の心中には、自分たちが強力なカナン人に敵う訳がないという恐れがありました。軍事的な行動を促す神さまの御計画に私たちは戸惑います。しかし、ここで、暗示されていることは、私たち自身の内側での罪との戦いです。私たちは罪に対して怖気づき闘うことを放棄したくなります。ですが、イエス様に頼るならば負けることはありません。必ずそれに打ち勝つことができるのです。

3.4
水曜日

「『だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。』」(マルコ 11:24) ●私たちが祈る時、しばしば目の前の現実が変わらないように見えます。しかし、確実に主のお取り計らいは見えないところで実行されているのです。信仰を通してイエス様は私たちに必要なものをすべて用意してくださっているのです。しかも、「すでに」与えられて

いるのです。この今主から受けている恵みの数々を数え上げることができたなら、私たちは喜びの中を歩み続けることができるでしょう。

3.5
木曜日

「あなたの御言葉が見いだされたとき、私はそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり、わたしの心は喜び躍りました。」(エレミヤ 15:16) ● 神の職務のゆえに、人々から嫌われ、殺意を向けられ、蔑まれていたエレミヤは究極の孤独の中にありました。そんなときに彼は神の言葉を見つけるやいなや、それを「むさぼり食べ」始めました。危機の中で主の言葉にしか頼れない時に、神の言葉への「愛」が生じてくるのです。

3.6
金曜日

「まず牛を臨在の幕屋の入り口に引いて行き、主の御前に立ち、その頭に手を置き、主の御前で牛を屠る。」(レビ4:4) ● 律法で神に捧げ物をする際、動物の頭に手を置くことが定められています。ここには、その動物と自分が一体となり「自分自身を焼き尽くして捧げる」という意味が込められているのです。私たちは神に自分自身を捧げることに召されています。主に喜ばれる人生とはどのようなものかを改めて考えてみたいと思います。

3.7
土曜日

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。」(エフェソ 2:14-15) ● イエスさまは律法学者が抱く自身への敵意を十字架によって壊し廃棄しました。私たち自身の中にある敵意や妬みもキリストの十字架の前には力を持たないのです。

3.8
日曜日

「イエスは言われた。『皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。』」(マルコ 12:17) ● 「金銭を捧げる」こと自体に価値があるわけではありません。それ以上に「自分自身」を捧げるために自分の持てるものを心を込めて捧げることが主に喜ばれるのです。私たちは強制されてでもなく、何か報酬があるからでもなく、ただ救いの喜びから自由に捧げるのです。